

---

このたびは「Annual Review 循環器 2009」をご購入いただきまして誠にありがとうございます。  
本書に以下の誤りがございましたので、ここに訂正させていただきますとともに深くお詫び申し上げます。

---

- 88頁 図4のタイトルと説明 (誤)図4 T細胞内におけるIP3を介したシグナル伝達経路  
ITPKCタンパク質がIP3をIP4へとリン酸化することにより、シグナル伝達は負に制御される。今回発見したITPKC遺伝子のSNPでは、ITPKCタンパク質の発現量が減少するため、この制御が弱まり、その結果シグナルはより多く伝達されT細胞の活性化が亢進すると考えられる。  
(正)図4 ITPKCの臓器別発現比較PBMCをPMAとイオノマイシンで刺激・活性化させると発現が3~7倍誘導される。
- 88頁 図5のタイトルと説明 (誤)図5 ITPKCの臓器別発現比較PBMCをPMAとイオノマイシンで刺激・活性化させると発現が3~7倍誘導される。  
(正)図5 ITPKアイソザイムの白血球内発現量比較PBMCおよびT細胞系、骨髄球系細胞株においてITPKCアイソザイムの発現量が他に比べ優位である。
- 89頁 図6のタイトルと説明 (誤)図6 ITPKアイソザイムの白血球内発現量比較  
PBMCおよびT細胞系、骨髄球系細胞株においてITPKCアイソザイムの発現量が他に比べ優位である。  
(正)図6 T細胞内におけるIP3を介したシグナル伝達経路ITPKCタンパク質がIP3をIP4へとリン酸化することにより、シグナル伝達は負に制御される。今回発見したITPKC遺伝子のSNPでは、ITPKCタンパク質の発現量が減少するため、この制御が弱まり、その結果シグナルはより多く伝達されT細胞の活性化が亢進すると考えられる。
- 130頁 左段 13, 14行 (誤)CABGの方が死亡率が有意に低く、再血行再建率は4.3倍と高かった  
(正)死亡率はCABGの方が有意に低く、再血行再建率はPCIの方が4.3倍高かった
- 132頁 左段 1, 2行 (誤)5年生存率はPCIの方がCABGより2.3倍高かったという  
(正)5年間の死亡率はPCIの方がCABGより2.3倍高かったという